

女たちの明治維新

第二回

賢章院とお遊羅

画：chinatsu

文：東川 隆太郎

鹿児島市生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



「薩長」といえば薩摩藩・長州藩の事を指すが、鳥取県にはこれに土佐と因幡を加えた「薩長土因」という言葉があるという。因幡藩こと鳥取藩も明治維新に貢献したのだという思いからだそうだが、その背景のひとつには、幕末の名君鳥津斉彬の母親が、鳥取藩主である池田治道の三女弥姫こと、周子であるという事実がある。鳥取の方全てが知っている事ではないのだろうが、鳥津斉彬の知名度の高さと、その母を称える思いが伝わってくる。

名君を生み育てた賢母

斉彬の父は鳥津宗家の二十七代斉興で、母の周子は正室にあたる。周子は教養が深く、鳥津家への嫁入り道具には中国の歴史書の入った本箱があった。また斉彬の教育にも率先して関わり、周子自ら漢文で書かれた書籍の素読をさせていたとい

う。現在では違和感のない周子の行動も、当時の大名の正室としては珍しいものであった。このような積極的な行動の背景には、もちろん斉彬への世継ぎとしての期待があったのだろうが、幼少期に両親を亡くした周子自身の境遇も影響しているのかもしれない。

その周子も文政七（一八二四）年、斉彬が十六歳の時に三十四歳の若さで病死する。斉彬の悲しみは深く「有明のかたぶく月ともろともに雲かくれぬる君ぞこひしき」との歌を霊前に捧げた。法名は賢章院と授けられ、現在に至るまで名君斉彬を生み育てた「賢母」として、様々な場面で顕彰されている。

藩政に翻弄され、悪女と呼ばれた母

反対に「悪女」として語られることが多いのは、斉彬の弟久光の母・お遊羅である。お遊羅は江戸の生ま

※お遊羅の漢字表記は「御祭祀提要」（尚古集成館蔵）による。



賢章院は江戸で斉彬を自ら養育した。国元のお遊羅は養子に出された久光を見守る生活だった。



賢章院の供養塔が残る大圓寺
(明治41年現在の東京都杉並区に移転)

賢章院 略歴

▶寛政4年(1792)

鳥取藩主池田治道の娘として生まれる。

▶文化6年(1809)

薩摩藩主島津斉興の長子・斉彬を出産。

▶文政7年(1824)

享年34歳で死去。
江戸・大圓寺に埋葬される。

お遊羅 略歴

▶寛政7年(1795)

江戸で町人の娘として生まれる。

▶文化14年(1817)

薩摩藩主島津斉興の子・久光を出産。

▶慶応2年(1866)

鹿児島城下で死去。享年72歳。
福昌寺に埋葬される。

れで、美貌に優れ、二十歳の頃に斉興の側室になり、久光を生んだ。また賢章院よりはるかに長生きして、慶応二(一八六六)年に七十二歳で亡くなっている。賢章院亡き後は正室同然の立場となり、斉興に対して久光に有利な進言などを行うこともあったという。斉興も久光に対して藩内の行事などで藩主代理の役割を担わせるなど、期待も高かった。これらのことが藩内家来衆の間で様々な憶測につながり、後に「お遊羅騒動」とも呼ばれる藩の内紛へ発展する。

しかし近年の研究で、この騒動は単なる家督相続問題のみならず、琉球外交や財政問題が複雑に絡んだものであることがわかっていく。渦中の斉彬と久光の関係も良好で、お遊羅が首謀者として騒動に関わった史実もないため、本当のお遊羅は小説などで語られるような悪女ではないようだ。幼少期の久光は複雑な境遇にあり、わずか二歳で島津家老の種子島家へ養子に入ったが、八歳で一度本家に復帰し、その八ヶ月後には重富島津家の跡継ぎとして婿養子に入っている。家の都合に振り回される久光を、実の母として陰ながら支えていたのであろう。

これまで賢母と悪女という相對するイメージで語られることの多かった賢章院とお遊羅。しかし、息子たちは対立することなく、久光は斉彬の遺志を引き継ぐかたちで藩を動かし、明治維新を迎えた。イメージでは語り尽くせない史実がそこにはあったということか。